海外建設協会
プロジェクト便り
◆タンザニア

ザンジバル・マリンディ魚市場改築工事

短期間で必要量の砂を確保

りんかい日産建設

２０１９年７月に着工したタンザニアのザンジバル・マリンディ魚市場改築工事は、20年前半から一気に世界に広まり出したＣＯＶＩＤ―19（新型コロナウイルス）の影響で同年４月から15カ月も中断することになった。りんかい日産建設の施工で22年10月に完成し、１年後の瑕疵（かし）検査もこのほど無事に終えた。地元市民の協力をなくして工事の完遂はなく、ザンジバルの地域社会を総括しながらプロジェクトを振り返ってみる。

アフリカ大陸の東側に位置する同国のうち、ザンジバルはウングジャ（Ｕｎｇｕｊａ）島とペンバ（Ｐｅｍｂａ）島の２島で構成された地域を指し、一般的にウングジャ島をザンジバルと称している。また、ザンジバル中心部であるマリンディ地区には世界遺産登録地区のストーンタウン（Ｓｔｏｎｅ Ｔｏｗｎ）がある。同地区は英ロックバンド、Ｑｕｅｅｎのボーカリストである故フレディ・マーキュリーの出生地でもあり、彼の生家が現存し博物館として多くの観光客が訪れる名所となっている。

ストーンタウンのみならず、ザンジバル北側のヌングイ、東側パジェ等には外資系リゾートホテルも数多く存在し、そこでは各種マリンスポーツも楽しめる。

タンザニアから独立行政権を認められているザンジバルは、一国二政府という政治形態を有していること、さらにザンジバル市民の多くがイスラム教徒であるといった特徴を持つ。そして、ザンジバル市民は本土側タンザニア人（Ｔａｎｇａｎｙｉｋａ）とは一線を画している面がある。

ザンジバルの主要産業は漁業・農業の１次産業が主であり、その他は欧米人やインド・アラブ系観光客等のインバウンド収入が主なもの。かの地を訪れる観光客の多くがタンザニア原産のタンザナイトと呼ばれる宝石をお土産に購入しているのが見受けられる。

とは言うものの経済的に潤沢な資金を保有しているわけでなく、道路整備、水道インフラ整備等はこれまで主に中国の支援で賄われてきており、今年にはトルコの支援も始まったようだ。

とかくアフリカ地域では「治安が悪い！」と思われがちだが、ここザンジバルはアフリカ地域で上位に入る安全な地域である。治安が悪くなれば観光客がいなくなり、かの地の経済状況が悪化するため、治安維持に力を入れていることもさることながら、ザンジバル市民の人間性に帰すところが大きいと考える。こうした治安や市民の人間性の良さも、工事を進める上でのアドバンテージとなった。

改築後のマリンディ魚市場（23年10月撮影）

アフリカ初進出案件を地元市民がサポート

着工当初の改築現場の状況（19年８月撮影）

今回改築したマリンディ魚市場（敷地面積３７００平方㍍）はウングジャ島の西側に位置する。政府開発援助（ＯＤＡ）の無償案件として損壊した施設を復旧し、魚市場棟（総延べ２３１９平方㍍）、給水設備棟、付帯施設のほか、外構舗装（対象面積１３８１平方㍍）、スロープ護岸（同９３０平方㍍）を整備した。

施工中はさまざまな苦労があった。主要材料である生コンの製造・供給もその一つで、特に細骨材の砂の調達は苦労の連続。砂の土取り場はザンジバル政府直轄地しかないため、他に選択の余地がなかった。

加えて数カ月単位で土取り場が変更されるという憂き目にもあった。これは、当時多くの工事が同時進行していたことから、砂の土取り場に毎日数百台のダンプトラックが取りに来ており、あっと言う間に砂が枯渇するためだ。

そこで、施主との協議を経て「工事に必要な数量を優先的に確保する」ことで合意。短期間で全数量を確保し現場作業に備えた。

いずれにせよ、当社にとって初めてのアフリカ地区での工事であったが、ザンジバル市民の協力者を工事事務所のサポーターとして招聘（しょうへい）できたことが、工事を円滑に進め、完成に導くことができたと考えている。

（土木本部国際事業部・垣内健一）